

た。

「やめて……っ♡も……、ひい……っ♡♡」

身を内側からおかしくされる恐怖に耐えかね、男に懇願する。

しかし男は、滑稽なほどに痙攣する少年の腰を、可笑し<sup>おか</sup>そうに見下ろしているだけだった。そうしてずぶずぶと、いっそう深く棒を突き刺してくる。

「ひいひい……っん……っ！♡♡♡」

ずぶずぶずぶ……っ一気に奥のほうまで来られて、頭がおかしくなりそうな快感が襲う。男に突き出すような恰好になった腰が、小刻みに震える。

「可愛いねえ。私は君がますます愛らしく思えてきたよ。どうだね？生涯をこのオペラ座の地下で共に過ごすというのは」

「いや……っだ……っアあッ！！♡♡」

ズチュ——っ♡♡

否定の言葉を<sup>はっ</sup>発したとたん、棒が一息に奥まで<sup>いれ</sup>挿入こまれた。